



若い力に期待

会長 鈴木 末一

会創立19年目、ならやまプロジェクト14年目の今年は、新型コロナウイルスの猛威で、生活スタイルを180度転換せざるを得ない状況に追いやられました。言うまでもなく、ボランティア活動でも感染防止のため、全面的な活動自粛に始まり、イベントの中止や縮小と、あらゆる場面で適切な判断と共通の理解を図らなければなりません。

9月以降は徐々に通常の活動へと復帰するようにはなりましたが、「3密」を避けることや、うがいや手洗いの励行、体温測定などのコロナ禍における活動ルールの順守を常に呼びかけてきました。こうした例年には見られない活動風景の中で、建築を学ぶ若者との出会いがありました。11月号で簡単に触れましたが、その後の経緯は会の未来を展望するうえで、大いに期待できる展開となったことを特筆しておきます。

東大寺は学問の寺です。奈良時代には「六宗兼学」、平安時代を経て「八宗兼学」と言われました。奈良時代以来の建築物を多く伝え、建築界のノーベル賞と呼ばれるブリッカー賞の授賞式が国内で初めて開催されたこともあり、東大寺は建築学の聖地とされています。

運営スタッフを含む全国の大学生34名が参加、「ワークショップ東大寺」が9月20日に開催され、小さな建築物8体が東大寺境内周辺を飾りました。その資材支援をしたことから当会と若者との縁が深まり、なかでも衣笠恭平(京都工芸繊維大1年)、天野萌絵(金沢大1年)、佐久間実季(奈良女子大3年)、岩田采子(東京理科大修士課程2年)の皆さんが、特に当会の活動に興味を抱いてくれました。衣笠君に、創立20周年記念モニュメントの制作についての話題を投げかけたところ、なんと、制作過程の輪の中には是非とも加わりたいと声を挙げてくれ

ました。衣笠君はならやま活動の実情に触れたいと、学業の合間を見つけて、10月中に3回も足を運んでくれました。学生諸君の熱意は日増しに高まり、12月に開催予定の20周年記念事業企画委員会に同席してもらうことになりました。

会創立20周年のキャッチフレーズは「20年出会いかさねて ひろがる未来」です。大学生諸君との縁は、まさにキャッチフレーズの具現化の一例そのものだと言えるかと思います。

シニアの私たちには思いもよらぬ斬新な発想が提起され、度肝を抜かれるような場面に出くわすこともあるかと思いますので、その都度、会員の皆さま方に情報を提供するつもりです。

「佐保地区(佐保、佐保川、佐保台)は『過去と未来をつなぐ街』とは、仲川奈良市長の提言です。歴史的風土と自然環境に恵まれた景観を次世代に引き継ぐために、私たちの活動理念、コンセプトの集大成になるような「記念モニュメント」が制作され、会員と未来の子供らをつなぐ「夢の懸け橋」になればと念じています。

学生諸君は、これまでに数回の情報交換を行い、すでに次のようなアイデアと制作方針が浮上しつつあるとのことでした。

- ・自然と一体化していくようなオブジェ
- ・自然へ帰る
- ・自然によって形態が変化する
- ・オブジェだけど遊具みたいなもの
- ・子どもが参加できるもの
- ・子どもたちと交流が持てるもの
- ・自然と共存できるようなもの
- ・土がたまっていき、草花が育っていく
- ・こじんまりしてあまり目立たないもの
- ・それでいて環境に馴染んでいくもの
- ・子どもたちが自由に遊ぶことができるもの

また、「夏休みなどに子どもたちと一緒に制作できたら面白いな」という声も出ているとのことでした。

ますます若い力に期待がかかります。